

「ぱちんこ依存問題」地域の受け入れ促すためのデータの蓄積へ リカバリーサポート・ネットワークが活動1年目の状況報告



左から米田座長、山田理事長、西村代表、力武副座長

RSN
西村直之代表

全日遊連の全面支援で立ち上げられた、ぱちんこ依存問題相談機関「リカバリーサポート・ネットワーク（RSN）」は4月19日、都内新橋の第一ホテル東京で相談業務開始から1年を迎えたことを受け、一連の活動状況の報告を行った。会見にはRSNの西村直之代表のほか、全日遊連の山田茂則理事長、ぱちんこ依存問題研究会の米田義

全日遊連の全面支援で立ち上げられた、ぱちんこ依存問題相談機関「リカバリーサポート・ネットワーク（RSN）」は4月19日、都内新橋の第一ホテル東京で相談業務開始から1年を迎えたことを受け、一連の活動状況の報告を行った。会見にはRSNの西村直之代表のほか、全日遊連の山田茂則理事長、ぱちんこ依存問題研究会の米田義

一座長、力武一郎副座長らが臨席した。

報告によると、この1年間でRSNに電話で寄せられた相談件数は989件で、地域別みると全体の1割以上がRSNがある沖縄県だった。次いで東京都、神奈川県、大阪府、福岡県の順になり、相談が寄せられたのは福井県と山梨県の二県のみだった。相談者は対象者の家族・友人が47%で最も多く、次いで本人が43%。西村代表によると、薬物依存、アルコール依存などの他のジャンルの相談と比べると、本人による相談割合は非常に高いという。

相談内容では「やめる方法」「やめさせる方法」が最も多く、556件に上った。相談電話に対しRSNは、相談者がいる市や県の精神保健福祉センターを紹介したケースが全体の3割以上を占め、次いでGA（ギャンブル・アノニマス）、ワンデーポート（強迫的ギャンブル回復施設）、ギャマノン（ギャンブル問題で悩む家族のグループ）といった民間の自助グループなどを紹介した。

西村代表は「実は精神保健福祉センターの中には、ぱちんこ依存の問題を適切に把握しているところは少ない。それでも我々はこうした問題を掘り起こし、それぞれの地域にぱちんこ依存の問題があるのだと認識してもらうしかない。数を上げると地域も対応するはずで、それまではいわば『寝た子を起こす』状態になりかねない」というジレンマもある」と述べた。

初年度の活動では問題を抱える本人に直接、RSNの存在を知つてもらうため、全日遊連の協力でホールのトイレなどに貼つてもらつたチラシなどで生の声を集めることに力を注いだ。しかし、初年度のデータだけで比較検討できない要素が多いことから、西村代表は「活動2年目はより多くの本人の声を集め、これを分析することで社会や業界に問題を発信していく」という。また、対象者の関連問題としては、精神障害が認められるケースが多く、西村代表は精神医療の受け皿の少なさが、パチンコにしわ寄せされる可能性を指摘した。



会見に臨席した山田理事長は、「まずは実態を知る」というところから始めたが、1年間の結果ではまだよく分からぬ部分もあるという。ところが、この問題もこれから明確になるという兆しが見えてきた。つまり、この活動を伝え、遊技者が破綻に至らないよう手を差し合う」と述べた。

さらに、副座長の力武氏は「業界に対する世間の認識を高めるにはこうした取り組みが非常に大切だと思う」として、よつとこの活動を伝え、遊技者がトイレ等に貼られたポスターを貼るよう、協力を呼びかけた。西村代表によると、このホールのトイレ等に貼られたポスターの効果が大きく、相談者の本人割合を上げる結果につながってい

る」という。

また、ぱちんこ依存問題研究会の米田座長は、「遊技機規則の改正など、従来の高い射幸性